

陳述書

甲 9 号証

平成 23 年 4 月 21 日

住所

後藤 徹

1. 略歴

私は、1963年11月2日、山形県米沢市にて父■（昭和6年11月25日生まれ、1997年6月22日死去）、母同■（昭和7年12月10日生まれ。現在78歳）の間に次男として出生しました。兄弟は、兄■（昭和35年3月28日生まれ。現在50歳）と、妹■（旧姓後藤）（昭和42年2月14日生まれ。現在43歳）とがいます。

1970年4月、私は東京都武蔵野市立大野田小学校に入学し、1972年9月に東京都保谷市立保谷第一小学校に転校し、1976年3月、同小学校を卒業しました。

1976年4月、私は保谷市立青嵐中学校に入学し、1977年に熊本県八代市立八代第二中学校に転校し、1979年3月、同中学校を卒業しました。

1979年4月、私は熊本県立氷川高等学校に入学し、1982年3月、同高等学校を卒業しました。

1983年4月、私は日本大学理工学部建築学科に入学し、1987年3月、同大学を卒業しました。

1987年4月、私は大成建設株式会社に入社しました。

2. 統一教会への入会

1986年8月31日、大学4年生だった私は、同じく東京に住んでいた兄に呼び出され東京御徒町のビデオセンターに連れて行かれました。そこは、世界基督教統一神霊協会（以下、「統一教会」と言う）の信者らが運営するビデオセンターで、既に信者になっていた兄にそこで学ぶように誘われました。私は、あまり乗り気ではなく、学ぶつもりはありませんでしたが、兄があまりにも熱心に勧めるので、その情熱に根負けしてビデオセンターに通い学ぶようになりました。

私はビデオ教材を通して、また、その後は、ツーデーと呼ばれる2泊3日の修練会、及びフォーデーと呼ばれる4泊5日の泊まりがけの修練会に参加して、統一教会の教理である統

一原理を学びました。

当時、私はこれから就職して社会人になるという、本来なら希望に満ちた時期であるにもかかわらず、世の中で横行する戦争や犯罪や離婚など、利己的な人間の姿に接するたびに気が滅入り、また、利己的な自分自身も好きになれず、人間と人生に希望と価値を見い出せず、悩み苦しんでいました。そして、このような明確な回答がない悩みに対しては誰にも相談できず、切羽詰まった末、精神修養と求道のために、大学の休みを利用して当時、神奈川県藤沢市にあった断食道場に行き、一人思索にふけったりもしていました。

そんな時に兄の紹介で出会った統一原理の内容は、大変衝撃的なものでした。神が実在すること、神の創造目的が愛と喜びの実現であり、神と人間の関係が親子であること、不幸と罪の原因が人間始祖の堕落にあり、そして、人類歴史が神の救済の歴史であったこと等々。この統一原理の内容により人生の目的と価値が明確になり、希望が与えられ、絶望の淵で悩み苦しんでいた私は、躍りあがらんばかりの喜びの中で死んでいた自らの魂が新しい命へと生き返った思いでありました。そこで、私は、統一教会に入会することにしました。

修練会に参加した後は、学生部という大学生の信徒らで組織する部署に所属し、ホームと呼ばれる寮で寝泊まりして生活しました。兄は私に続いて、当時短大生だった妹も伝道しました。妹は短大近くのビデオセンターで統一原理を勉強するようになり、統一教会に入会しました。

1987年3月、私は日本大学理工学部建築学科を卒業し、同年4月より大成建設株式会社に入社しました。同社入社後は、御徒町のホームに寝泊まりしつつ、通勤していました。

3. 第1回目の監禁

当時、1987年という年は、マスコミの影響もあって統一教会信者に対する棄教目的の拉致監禁による強制脱会説得が頻発しており、そのような中で同年5月頃、まず、兄が、自宅に帰った際に、両親らによって拉致・監禁され脱会説得を受けました。兄が後日話したところによると、自宅に帰る道すがら、なぜか父親が出迎えに来ていて、その時、兄は「父親がわざわざ迎えに来るなんて、めずらしいな。」と思ったそうです。そして、父親と一緒に自宅の方に歩いていると、突然、父の手が兄の体にかかり、父が「それ！」と叫ぶと、物陰から見知らぬ男たちが突然襲いかかってきて、兄は、付近に停めてあった車の中に拉致されたそうです。そして、その車で連行される途中、踏み切りで車が止まった際、兄は、とっさに車の窓から外に逃げ出したそうです。そこで、路上で父らと揉み合いになり、誰かが警察に通報したらしく交番に連れて行かれ、兄が、拉致されたことを警察官に必死に訴えて助けを

求めたにもかかわらず、結局、警察は親の言い分を聞き入れ、再び車に乗せられて監禁場所に連れて行かれたとのことでした。

兄に対して脱会説得をした脱会説得専門家の一人は宮村峻といい、株式会社タップという広告代理店を営んでいる人物で、後日、私に対する2度に亘る拉致監禁に関与したのもこの宮村です。宮村は、当時、荻窪にある日本イエスキリスト教団荻窪栄光教会の森山論牧師と組んで、同教会を拠点に複数の統一教会信者の父兄等から、彼らの子である信者を脱会させる依頼を受け、父兄等に順番待ちをさせ、順番が来るまでの間、拉致監禁による脱会説得の手法を父兄らに指導していました。宮村が組織していた父兄らの会を「水茎会」と言い、水茎会では、順番が回ってきた父兄は、既に信者の脱会に成功した父兄らの協力を得て自分の子を拉致し、荻窪栄光教会近隣のマンションの一室に監禁するというシステムができており、そこに宮村が来訪するなどして脱会説得が行われました。私も後日順番待ちの父兄の名簿を見ましたが、そこには父兄等の名前がびっしりと記載されていました。聞くところによると、順番待ちの父兄の最後尾は数百番代になるとのことでした。

兄は統一教会を脱会后、宮村が行う統一教会信者に対する脱会説得活動を手助けするようになりましたが、更に前記株式会社タップに就職し、宮村のもとで鞆持ちのようにして働くようになりました。順番待ちの父兄の名簿上は、私に対する脱会説得の順番はずっと後だったようですが、兄が余りにも熱心に宮村の脱会説得活動を手助けしたため、私を脱会説得する順番を早めてもらったということの後で兄から聞かされました。

当時、統一教会で熱心に信仰生活をしていた兄が、実家に帰ったまま突然失踪したため、拉致監禁された可能性が高いと見ていた私は、兄のことが心配で夜も寝れないほどでした。そこで、実家や兄が滞在していたというキリスト教会に行くなどして兄の行方を方々捜しまわりましたが、見つけることはできませんでした。

1987年10月、父から突然連絡があり、「■（後藤氏兄）が会いたいと言っている」と言われて私は新宿に呼び出されました。私は、拉致監禁されるかもしれないという不安もあったため、統一教会の男性2人が拉致に備えて密かについて来てくれていました。父に言われるままついていくと新宿の京王プラザホテルに入っていく、エレベーターに乗りましたが、その時に、ついて来てくれていた男性2人とは離れてしまいました。かなり高層階の一室に入ると、部屋の中には既に兄が待機しており、私は兄から「実は統一教会をやめることにした。徹にも話を聞いてほしい。」と切り出されました。

気がつくと、部屋の入り口のドアは何らかの細工により中から開かないように固定され、部屋から出られない状態になっていました。その部屋の構造は、隣接する二つの部屋が一つの

ドアでつながっているタイプの部屋で、ホテルの廊下からその部屋への出入りは、常に隣の部屋を通して出入りしていました【図1】。これは、もちろん隙を見て脱出されないようにするためです。私はやはり兄が呼び出したのは監禁して脱会説得をするためであったことが分り、たいへんなショックを受けました。

しばらくすると、宮村峻が元統一教会信者を数人連れて部屋に来るようになり、脱会説得を受けました。その一つの場面として、宮村が、元信者の男性の一人に、「今の君にとって、文鮮明とはどんな存在だい」と尋ねると、その男性が、ヘビースモーカーである宮村が吸った灰皿のタバコの吸い殻を指さし、嘲笑して「こんな感じです」と侮蔑に満ちた顔で言った時の屈辱感は忘れることができません。私は、騙し討ちのように監禁されたことに憤慨し、トイレに入ると中からカギをかけ立てこもり「出せー！助けてくれー！」と叫んで騒ぎ立てました。すると、外からカギを開けられ、トイレから引きずり出されると、父と兄と取っ組み合いになりましたが、多勢に無勢のため取り押さえられました。

監禁下で宮村や元信者に教会や教理に対する批判を強制的に聞かされる中、私は、何とか脱出したいと思い、椅子をガラスに投げつきたい衝動に駆られ、一度椅子を持ちあげたこともありましたが、高層階であり、地上の通行人にあたってはいけないと思い、投げつけることを思いとどまりました。私は、毎日、教会や教祖の悪口を強制的に聞かされ、耐え難い苦しみを味わいました。そして、3日くらい後、私は信仰を持ったままでは部屋から出られないと判断し、意に反して脱会した振りをしました（偽装脱会）。

約1週間後、京王プラザホテルから杉並区荻窪のマンションの一室に連れて行かれ、同室にて1ヶ月弱監禁されました。私は常に両親及び兄によって監視される中、同室から前記荻窪栄光教会の礼拝等の集会に参加させられたり、近隣のマンションの一室で監禁されている統一教会信者の脱会説得に同席させられました。

不当な監禁下で脱会説得を受け苦しんでいる信者を目の前にして助けたい気持ちに駆られましたが、ここで偽装脱会がばれると再び嚴重な監禁下での執拗な脱会説得を受けなければならなくなると思うと断念せざるを得ませんでした。荻窪栄光教会の集会には、宮村や森山によって脱会させられた元統一教会信者等が多数来ていましたが、その中の一部は、兄のように宮村らの脱会説得活動に積極的に荷担していました。また私は、同教会のほぼ向かいにある一軒家で「水莖会」の集会が開催された際、これに参加させられ、宮村が父兄らを拉致監禁による脱会の指導している場面を目撃したこともあります。

私はこの年の春に建設会社の新入社員として千葉県船橋市の建設現場に配属されて現場監督として仕事をしていました。しかし、突然拉致されたため、何の連絡もできずに何週間も

欠勤を強いられ、監禁ないし監視されている間は会社にもいっさい連絡を取ることは許されなかったため、会社に迷惑を掛けてしまったことが苦痛でなりませんでした。

1 1月下旬頃、逃走する隙を窺っていた私は、荻窪栄光教会の日曜礼拝に参加させられた際、トイレに行く振りをして教会建物から脱出し、ホームに逃げ帰りました。

4. 第1回目の監禁から脱出後の経緯

ホームに帰ってより後は、再び家族らによって拉致監禁される恐怖に苛まれ、もともと所属していた兄が知っている部署から他の部署に移してもらい、居場所がばれないように「鈴木祐司」と偽名を名乗り、家族に居場所を告げることもできず、潜伏生活を余儀なくされました。道にワゴン車が止まっていると、物陰から誰かが飛び出してきた襲撃され、そのワゴン車に拉致されるのではないかと気が気ではありませんでした。

実際、当時、日本では全国で数多くの統一教会信者が突然失踪する事件が頻発しており、1990年～92年の3年間だけで、941名が失踪しました。その内、統一教会に戻ってきた233名に聞き取り調査をしたところ、失踪理由が本人の意思に反する拉致監禁による棄教目的の強制説得であったことが分かっています。特に1992年に至っては1年間で375名が失踪し、延べ、一日に一人以上が拉致監禁されるという異常さでありました。

そのような中で私は「信教の自由が憲法において保障されている現代日本において、なぜ、中世の魔女狩りのような恐怖に怯えなければならないのか」と嘆息しながら「今日は、自分が拉致監禁されるかもしれない」と一時も心の休まる暇もないほどでした。

この春にせつかく入社した会社に復帰したい気持ちもありましたが、職場に復帰すると家族らに私の居場所を知られ、再び拉致監禁されるかも知れないという恐れがどうしても拭えず戻ることができませんでした。このため私は仕方なく大成建設を退社し、その後は、信徒組織にて献身的に伝道活動や教育活動に従事するようになりました。

その頃、私は、兄と私が立て続けに拉致監禁されたため、次は妹が狙われるのではないかと心配していました。そして、その心配は現実となってしまいました。1989年初め頃には、今度は妹が両親、及び兄等によって拉致され、脱会してしまいました。それからしばらくの間、私は妹を強制説得から守ることができなかった自責の念に駆られ苦しみました。

兄は、脱会后、宮村が行う統一教会に対する反対活動に加わるようになり、1991年には東京地裁に統一教会を被告とする損害賠償請求訴訟（いわゆる「青春を返せ裁判」）を提起

しています。

1992年8月、私は■（後藤氏の最初の婚約者）という統一教会の女性信者と共に韓国ソウルで行われた3万双の国際合同結婚式に参加しました。合同結婚式は、参加した相手と永遠の伴侶として将来、幸せな家庭を築くことを誓い合う出発の儀式であり、もちろんそれは、私の願いでもありました。しかし、残念なことに、その後、■さんは家族らによって脱会説得を受け、信仰を失ってしまいました。このため、私は■さんと結婚生活を開始することはできませんでした。

最初の拉致監禁から年月が過ぎる中、再び拉致監禁されることに警戒しつつも、いつまでもこのままではちが明かないと思い、電話での会話から始まり、手紙を送ったり、家族の誕生日にはプレゼントを贈ったりして、少しずつ家族との関係を修復する努力をしました。そんな中、確か1992年頃だと思いますが、父親との電話での会話で父が「もうあんなことはしない」と明言して、二度と拉致監禁をしないことを約束してくれました。そこで、こちらの居場所を家族に伝え、私が統一教会の信仰を持っていることには反対しながらも再び家族と交流ができるようになりました。

1995年1月、兄は■という女性（以下、「兄嫁」と言う）と結婚しました。兄嫁も、親族に拉致監禁され、宮村、及び松永堡智（日本同盟基督教団新津福音キリスト教会牧師）らから脱会説得を受けて統一教会を脱会した元統一教会信者で、脱会後は統一教会に対する反対活動を行うようになり、1991年に新潟地裁で「青春を返せ裁判」を提起しています。

1995年8月、私は■（後藤氏の2回目の婚約者）という統一教会の女性信者と共に韓国ソウルで行われた36万双の国際合同結婚式に参加しました。既に年齢も31歳となっていたことから、この頃より私は将来家庭を持つことに備えて、統一教会での信仰は続けつつも信徒組織での活動を辞め、一般の仕事に就くことを考えていました。しかし、同年9月に私が2回目の拉致監禁の被害に遭ったため、■さんと結婚生活を始めることはできなくなりましたし、一般の仕事に就くこともできませんでした。

5. 第2回目の監禁（今回）

（1）新潟のマンション（パレスマンション多門607号室）での監禁

1995年9月11日夜、東京都西東京市の自宅に帰宅して滞在中、それまでの和やかな雰囲気が一変し、その場に緊張が走り父親が「徹、ちょっと話がある」と言ってきました。そして、統一教会の批判を言いだし「ここでは何だから、別の場所に行こう」と言ってきまし

た。私は、「しまった。またやられた。」と再び拉致監禁されることを直感し「話ならここですればいいだろう」と反論し座り込んだまましばらく抵抗していましたが、兄嫁が「いつまでもこんなことをしててもしょうがないわ。もう行きましょよ」と言うと、兄と父に左右両脇を抱えられ、力づくで持ち上げられてしまいました。そして、母、兄嫁、妹、及び庭に潜んでいた見知らぬ男性らによって四方八方を囲まれ、抵抗できない状態にされ、家の中から引きずり出されると、ワゴン車に無理やり押し込められ拉致されました。

この時、私は、もうやらないと約束していたにもかかわらず、再び拉致監禁されたショックと恐怖、また、用意周到に見知らぬ他人まで動員して逃走を防ぐかのように庭に配置しているのを目の当たりにして、絶望感に襲われ、激しく抵抗する気力さえも失せてしまいました。後日判ったことですが、庭に潜んでいた男性は、宮村が経営する株式会社タツの従業員でした。

ワゴン車には家族及び見知らぬ者達が乗り、(叔父の■氏だったかもしれない)見知らぬ男性が運転しました。私は、一番後ろの席の真ん中に座らされ、私の右側に父、左側に兄が座り、父は、終始、私の腕を掴んでいました。私はこの時、憤って、家族に対し、「もうこんなことはやらないと言っただろう」と言うと、家族は無言でした。私は、「どこに連れて行くつもりだ」と尋ねましたが、兄が「行けば分かる」と答えただけで行先は教えてくれませんでした。私は、彼らによってワゴン車に監禁されたまま新潟に連行されました。

また、連行途中、私は用を足したくなり、トイレに行きたいと要求しましたが、家族等はトイレに行くことを許さず、代わりにビニール製の携帯用簡易トイレを私に手渡し、これで用を足すようにと言いました。このため私は見知らぬ者達と同乗するワゴン車の中で用を足さざるを得ず、大変屈辱的な思いをさせられました。車内では、誰も話をせず、終始無言で、異様に緊迫していました。

「パレスマンション多門」(このマンション名は後に警察が捜査して特定し、教えてもらいました)に到着すると、私は、両脇にいた兄と父に押し出されるようにして、車から降ろされました。この時、私は、「やはり監禁場所を準備していたのか、もう拉致監禁はやらないと約束していたにもかかわらず、用意周到に拉致監禁を計画して準備までしていたのか!」と、家族に裏切られた悔しさと情けなさから、激しく抵抗する気力さえも失せ、兄と父に両脇をつかまれ、家族や運転手の男に周りを囲まれたまま、気がつくと607号室に連行されていました【図2】。

同室は、窓が全て「ウィンドロック」という防犯錠が取り付けられてあり【写真1】、内側から開けられないようにされていました。奥の部屋【図2のA】も引き戸の上部をウィンドロ

ックで施錠され開けられないようにされていて、実際、一度も開けられたことはありませんでした。また玄関は、私が部屋に入れられた後、何らかの形で内側から施錠されました。このことは、松永牧師と元信者が同室を訪れ、玄関をノックした際、ちょうど私がトイレから出てきた時があり、松永牧師等を迎えに玄関に向かう父親の手に解錠するための鍵が握られていたことから間違いありません。

同室に連行され、しばらくした後、私は気力を振り絞って、家族に対して「もうこんなことはしないと書いていただろう」「(窓の施錠を指して) この鍵はなんだ。こんな人権侵害が許されると思っているのか!」「こんなのは犯罪だ!」と糾弾しました。それに対し、父親は「確かにそのように言った」と認めながらも、「他に、どうしようもなかったんだ。」と、話してきました。そして、兄は、私に対して、「言うておくれ、この問題は絶対に許さんからな。この問題を解決するまでは絶対に妥協しないし、この環境もこのままだ。我々はどんな犠牲を払っても決着をつける。お前もそれは、覚悟しておけ」と言って、私が完全に棄教するまで絶対に監禁から解放しない旨を宣言しました。そして、この兄の言葉は単なる上辺だけのものではありませんでした。兄を始め家族等のこの異常な決意によって、私は合計12年5ヶ月間に亘って監禁されたのです。しかも、後述の通り、私が3度に亘る命がけのハンガーストライキを決行しなければ、この監禁は今なお継続していたとも言えるのです。その他兄は、「窓から飛び降りたら絶対に死ぬぞ」と言って、私が窓からの脱出を図らないよう牽制し、「死なない程度に悩め」と言って私に精神的苦痛を与えました。

私は、約8年前に京王プラザホテルに監禁され、前記宮村に強制説得された時の苦しみや痛みがえってきて、夜、床についても、これからまたあの苦しみが始まるかと思うと眠ることができず、叫びたい衝動に駆られました。

というのも、監禁され、自由を奪われただけでも、その苦痛は、計り知れないものがあると思いますが、強制棄教を目的とする拉致監禁の場合、それと共に、自分の命よりも大切な信仰を踏みにじられ、それが破壊されるまで解放されないという恐怖と苦痛は筆舌に尽くし難いものがあるからです。

同室では両親、妹、兄嫁が監禁場所に常駐して私を監視していました。数日経った頃、父が「まずは、徹が信じている統一原理(統一教会の教理)を教えてくれ」と言ってきました。

これは、拉致監禁によって強制棄教する時の脱会説得の専門家が家族に指導するいつものやり方で、初めは信者に自分が信じる教理を説明させておいて、一通り説明を聞いた後で、「あなたの話は分った。今度はこちらのお話を聞いてほしい。」と切り出し、第三者である脱会説得の専門家を介入させるきっかけを作るのです。

私は、「監禁という不当な環境にありながら、自分が信じている教理を説明する必要などまったくない」と憤りながらも、早く解放されたい一心から、約一週間かけて家族にノートに図を書くなどして統一原理を説明しました。その、家族への説明が終わった後、予想通り父が「統一教会に詳しいキリスト教の牧師先生がいる。是非、話を聞いてほしい。」と話してきました。

その後、すぐに松永牧師が元信者らを連れてマンションを訪れるようになりました。私は、牧師でありながら、このような非人間的な監禁下にある自分に脱会説得を行う松永に対し激しい怒りと憤りを覚えました。松永は「統一教会は問題のある団体だ」と切り出すと、多い時には週に3日、合計20回～30回、同室を訪れ、教理や教祖の批判を繰り返し、棄教を強要しました。

松永は、既成キリスト教会と統一教会を比較して「あなたは、どうして味噌とクソの区別もつかないのか」と言って侮蔑し、「メシアという言葉はもともと聖書から出てきている。その聖書から見て、文鮮明がなぜメシアなのか。説明してみなさい」と言うので、私が「誰が何を信じようと自由でしょう。私は、統一原理に感動して統一教会の信者になった。もし私をやめさせたいなら、統一教会の批判ばかり言うのではなく、統一原理以上のものを提示して下さいよ。」と言うと松永は「私は、ご両親から、(キリスト教の伝道ではなく)説得を頼まれている。まず、あなたが問題のある統一教会のことをここで真剣に考えることが先だ。ここは、そのための話し合いの場所だ。」というので、私は、「こんな所に閉じ込めておいて話し合いなどあり得ないでしょう。卑怯だ！あなた方が批判している統一教会でも、人を監禁して信者にするようなことなど絶対にありえないでしょう。」と反論しましたが、全く取り合わず、悪びれもしない態度を見て、私は、はらわたが煮えくりかえる思いに駆られました。

また、松永は統一教会の教理解説書である原理講論を批判し、「原理講論には、キリスト教の教理の中で、淫乱が最も大きな罪として取り扱われている、と書いてあるが、これは間違っている。旧約聖書の十戒では、姦淫は七番目で、一番ではない」とか、「人間の子は人間。サルの子はサル。神の子であるキリストは、神に決まっているでしょう。どうして人間が神の子になれるのか。神の子であるキリストは、神ご自身であるイエス以外にありえない。人間である文鮮明がメシアになれるはずはない。」等、自分が信仰するキリスト教の教義を絶対視し、一方的に統一教会の教義を異端視して批判しました。松永は、興奮すると時に大声を張り上げ、「統一教会は、犯罪集団だ！」「こんなに金、金と言うのが、メシアのはずがない。イエス様と全く違うじゃないか！」等と喚き立て、私に精神的苦痛を与えました。

また、この頃、松永によって拉致監禁下で脱会説得された約20人の元信者が入れ替わり立

ち替わりマンションを訪れ、自分たちが統一教会を脱会した理由等を聞かされました。来訪した元信者は、■（女）、■（男、現在新津福音キリスト教会牧師）、■（男）、■（男）と
いった者達です。その話の内容は、統一教会や教理、教祖に対する批判的な内容ばかりで、
連日、閉ざされた空間で聞きたくもない批判を強制的に聞かされる苦痛は耐えがたく、私は、
このままでは精神が破たんしてしまうのではないかと思い「神様、頭がおかしくなりそうで
す。もし、精神が破たんしてしまうとあなたを信じることもできなくなります。どうかお守
りください」と祈らざるをえませんでした。

また、監獄のような監禁部屋において松永、元信者、家族に囲まれ、私一人に対し集団で、
批判を浴びせるやり方は、まさに中世のキリスト教会で行われていた魔女狩り裁判におけ
る異端審問に匹敵し、自由と民主の現代日本において、このような蛮行が行われていること
を実際に体験するに及んで、「いったいこの日本は、本当に法治国家なのか」と嘆かずには
おられませんでした。

松永に脱会説得を受けた数多くの統一教会信者の中で、監禁解放後、脱会後のリハビリ期間
として松永の教会に通っていた人たちの証言によると、松永は、当時、自身が主任牧師の教
会である新潟県新潟市にある新津福音キリスト教会で毎週土曜日の午後、統一教会信者で
ある子供の脱会を望む父兄等を数十人集め、子供を脱会させるための勉強会を行なってい
ました。その勉強会では、まず、松永が出演する8種類のビデオ等により統一教会の実態や
統一教会員の考え方などを学ばされ、特に「対応（1）（2）」というビデオでは、脱会説得
のための監禁前や監禁中、また、脱会説得後に親はどのように子供に接するか、拉致から監
禁、監禁後の手ほどきが解説されていました。信者父兄は、自分の子供を救出するその時が
来るまで松永が主催するこの勉強会に何回も出席し、このような内容のビデオを繰り返し
見せられます。

この勉強会で、拉致監禁による説得以外に統一教会をやめさせることができないと教え込
まれた父兄等が、拉致監禁を決意して松永に相談すると、「2 DAYS」と呼ばれていたセ
ミナーへの参加を勧められます。このセミナーは、統一教会信者に対する拉致監禁をその父
兄らに行わせるための教育と実践方法を学ぶのが目的で開催され、その中心は、拉致監禁の
ための具体的な模擬訓練による指導です。このセミナーでは、松永が自ら拉致監禁の具体
的な内容について黒板を使って説明します。

この具体的な内容は、このセミナーに松永とともに何度も参加し、セミナーの講義も担当し
たことがある小出浩久氏が詳しく証言していますが、極めて具体的な方法まで細かく指示
しています。なお、小出氏は、監禁説得の準備のために、新潟市内にあるロイヤルコープと
いうマンションに松永と同行し、玄関を内側から施錠するためのチェーン式の鍵を持たさ

れ、窓が内側から開けられないように特殊な器具を取り付け、障子戸なども開かないように釘で打ち付けることを行っています。これら全ては松永の指示で行ったということです。本来、人の魂に安らぎを与える牧師ともあろう人物が陰でなんと酷いことをやらせているのかと、本当に怒りと憤りを禁じえません。

もともと脱会説得の方法の知識も経験もない統一教会信者父兄が、このような松永による教育と指導を受けずに、自分で計画・実行するとはとても考えられません。用意周到な準備と余りにも手際良い拉致監禁など一般人に考えつく芸当ではありません。私の両親は、既に前記宮村の指導のもと、私を含め3人の子供に対する拉致監禁による脱会説得を実行しましたが、今回の脱会説得においても、改めて松永に相談・指導を仰いだことは、間違いありません。

松永や元信者が同室に来るときは、ドアをノックする回数を取り決めていたようで、いつも合図のように何度かノックの音がしていました。すると、家族は緊張した様子で玄関に向かって松永や元信者を迎え入れていました。当時、私はそのノックの音を耳にし、これからまた聞きたくもない批判を強制的に聞かされると思うと、体中に緊張とものすごい不快感が走り、血の気が引いていくような感覚に襲われました。

監禁から解放されて3年以上経った今もその後遺症は残っていて、「トントン」というノックの音を聞くと背筋に緊張が走り不快な気持が襲ってきます。

また、この頃、兄は、東京で働いていたため、時々顔を見せる程度でしたが、来る度、私に対し、「今、何を考えている？」「松永先生の話はどうだ？」「原理（統一教会の教理）にまだ確信があるのか？」等、質問を投げかけ私の気持ちを聞き出そうとしました。これは、私に対する脱会説得がどの程度進行し、彼らの言うマインド・コントロールがどの程度解けているのかを見極めようとしていたに違いありません。私は、監禁下で情報をコントロールしながら、人の心（思想信条）に土足で踏み込んでくる彼らのやり方に、言いようのない怒りと嫌悪感を覚えました。

私は、拉致監禁される一月ほど前に統一教会の合同結婚式を通して将来を誓い合った婚約者がいましたが、その婚約者と連絡を取ることができない期間が長くなるにつれて「彼女は、今どうしているだろうか。心配しているに違いない。」「私のことを必死に探しているに違いない。」そんな思いが、私の心を締め付けました。

そうしたこともあり、拉致監禁から3カ月半ほど経った1995年12月末、私はこのままでは監禁状態から解放されることは不可能であると判断し、監禁から脱出するために、意に

反して信仰を失い脱会を決意した振り、すなわち“偽装脱会”をして、脱会した証しとして意に反して脱会届を書きました。脱会届を書くと、松永から私が統一教会の入信から脱会を決意するに到った手記を書くように指示され、レポート用紙10枚ほど書かされました。

私は、信仰を保っていたにもかかわらず、本当に信仰を失ったかどうか確かめるための「踏み絵」のような手記を書かされるのは、苦痛以外の何物でもありませんでしたが、監禁から一刻も早く解放されたい一心で意に反して本心を偽り、松永や家族の意に沿うような内容の手記を書きました。

この、偽装脱会をしていた期間は、マンションからの脱出を図りたくとも、安易に行動できない、たいへんな緊張を強いられる期間でした。なぜなら、例えば玄関ドアの施錠の状態を確かめようとして玄関を覗くような行動をとることにより、もし、偽装脱会をしていることがバレてしまった場合、脱出が一層困難になるばかりか、松永牧師等による脱会説得が再び始まり、教会の悪口や中傷罵倒を毎日のように聞かされるようになることは明らかだったからです。私にとり、その苦しみは到底耐え難いものでした。

ゆえに、この期間は、監視がなくなり確実に逃走できる状態が訪れるまでは、信仰を捨てていないことを疑われるような行動を取ることはできませんでした。私は、ひたすら完全に逃走することができる瞬間が訪れるのを辛抱強く待つしかなかったのです。しかし、私が脱会を表明した後も、家族等は私を監禁し続けました。1987年の1回目の監禁の時、私が偽装脱会をして逃走したため、今度は家族等が慎重になったのだと思います。

私は、いつまでも外に出してもらえないことにしびれを切らし家族に対し「ザーとマンションにいと息苦しいので、ちょっとでいいので外を散歩させてくれないか」と頼みましたが、家族は「まだ、それはできない」と言って聞き入れませんでした。月日が経つにつれ、募る焦燥感に押しつぶされそうになった私は、また、不当に監禁されていることに対する憤りも相まって「もう、(脱会届を書いて)1年も経つのに、どうして散歩もさせてくれないのか!」と家族を責めましたが、そのような態度をとればとるほど、逆に出してもらえないと判断し、1997年の初め頃には、上のようなことを言わなくなり、ひたすら監視がなくなりマンションから出してもらえる日を待ち続けました。

1996年3月、同室にて監視していた父の容態が突然悪化して入院し、心臓のバイパス手術を受けましたが、私は一切監禁から解放されませんでした。心臓の手術が成功した後、父は同室に戻ってきましたが、1997年3月、癌のため再び入院し、同年6月22日、死去(65歳)しました。同室に監禁されている間、父の入院等で、監視が女性だけになった時もありましたが、玄関には内側から脱出できないよう施錠がされていることや上記理由も

あって、ひたすら完全に逃走することができる瞬間が訪れるのを辛抱強く待つしかありませんでした。

(2) 東京のマンション（1カ所目・荻窪プレイス605号室）での監禁

父の死後間もなく、私は「父と最後のお別れをするから」との理由で再度ワゴン車に監禁され東京の自宅に連行されました。私は再度新潟のマンションに戻されると思ったことから、財布、免許証、現金などの所持品は新潟のマンションに置いたままにしていました。妹と兄嫁に先導され玄関を出ると男性数人が待機していて、エレベーターと一緒に乗り、一階まで降りると、周りを取り囲まれたままワゴン車に乗せられました。ワゴン車に乗った後、分かったことですが、玄関前に待機していた男性の内の2人は、兄嫁の上の2人の兄弟でした。この時、新潟のマンションに脱会説得に来ていた元統一教会信者の男性（■という名であったと思います）がワゴン車を運転し、助手席には兄嫁が座りました。また、運転席の後ろの席には、兄嫁の2人の兄が中央及び右端に座り、左端には元信者女性が座りました。また最後列には、右端に妹、左端に（■と名乗る元信者男性が座り、私は、中央に座らされました。最後列中央に座らされたのは、私が脱出できないようにするためだと思います。

この時は、父親が亡くなったショックと悲しみ、また、偽装脱会がバレるのではないかといった緊張感、未だ監視と監禁を解こうとしない家族らに対する怒りと憤りなどがないまぜになり、心の平静を保つのに必死でした。この時も前述したように偽装脱会がバレぬように振舞うしかなく、私は、完全に逃走することができる瞬間が訪れるまで、ひたすら待ち続けるしかありませんでした。

父の亡骸が安置されている西東京市の自宅に着くと、そこには、母、及び兄が既に来ており、私はそこで父の亡骸と対面しました。私は決して父と仲が良かったとは言えませんが、会社の幹部として仕事に情熱をもって取り組んでいる父を尊敬しておりました。仏教徒であった父とは信仰や価値観の違いがあったとはいえ父と何とか理解し合えたらと念願していました。しかし、こういった形で今生の別れの時が来るとは、本当に無念の思いでいっぱいでした。父の亡骸と対面している間、周りを親族だけでなく、新潟から同じワゴン車に乗ってきた父とほとんど面識のない元信者までもがずらりと取り囲んでいました。

この後、再び周りを家族や元信者らに取り囲まれながらワゴン車に乗せられると、ワゴン車の中で初めて兄から、「もう新潟には戻らない」ということを聞かされました。私はワゴン車により、都内1カ所目の杉並区荻窪の荻窪プレイス（このマンション名は後に警察が捜査して特定し、教えてもらいました）に連行され、同マンションの605号室に監禁されました【図3】。

同室では、兄は昼間は仕事に出ているものの、母、妹、兄嫁が常駐し監視を続けていました。玄関の手前にはカーテンが引いてあり、玄関の様子を直接見ることはできませんでした。私は、引き続き偽装脱会中であったため、カーテンをめくって玄関の様子を見るなどの軽率な行動は取れませんでした。

それでも、わずかな隙を見てさっとカーテンをめくり玄関を凝視すると、ドアのノブのあたりに数字を合わせるダイヤルロック式の鍵がはっきりと見えました。逃走の隙を窺っていた私は、その瞬間、「まだ監禁が解かれていないのか！」と心の中で叫び、憤りと絶望感にうちひしがれました。

また、6階のため窓から脱出できるような高さではありませんでした。また、新潟のマンションに置いたままにしていた財布、免許証、現金などの所持品は、ついに私の手元には返却されませんでした。

監禁が長期化していくにつれ、兄はだんだんいらついてきたようで、ある日、私が、何気なく玄関近くに行っただけで、兄は「向こうに行ってる！不愉快だ！」と怒鳴りつけ、玄関に近づくことを許しませんでした。その時、私は、その兄の言動に言いようのない恐怖感を覚えました。

(3) 東京のマンション（2カ所目・荻窪フラワーホーム804号室）での監禁

1997年12月末頃、母、兄夫婦、妹及び数人の見知らぬ男性らによって再度ワゴン車に監禁され、荻窪フラワーホームという名称のマンション（杉並区荻窪3-47-15）に連行され、同マンションの804号室に監禁されました【図4】。同室で私は一番奥のベランダに面した部屋（図のM）に連れて行かれ、普段はそこに居るように言われました。私は同室到着後間もなく、玄関から出ることが可能かどうか確認しようとして、玄関が見える位置まで行ってみました。すると、玄関は内側からクサリと南京錠で開かないようにされているのがはっきりと見えました【写真2】。この様子を見た兄は、「シッ、シッ」と言って手の甲を私の方に向けて振り、私を奥の部屋に追いやりました。

私は人間扱いされていない屈辱を感じ、「これじゃまるで犬扱いじゃないか。俺は人間だぞ！」と言って抗議しました。また、窓には施錠できるタイプのクレセント錠が取り付けられており、専用の鍵によって施錠されていて開けることができませんでした【写真3】。同室にて、母、兄、妹、兄嫁が、私が逃げないように監視し、しかも一番奥の部屋の襖を開放したままにするよう言われました。

新潟のマンションに監禁されて以来、監禁期間は2年3ヶ月間に及び、脱会の意思表示をしてから2年を超えたにもかかわらず、私は一向に監禁から解放されませんでした。偽装脱会での膠着状態が続く中、この時期の私の精神状態は、限界を迎えつつありました。憲法において基本的人権と信教の自由が保障されている日本にいながら、自分はなぜこんなことを続けなければならないのか。悪いのは監禁という手段を用いて脱会を強制する彼らの方であるのに、全く悪びれるそぶりもなく統一教会の批判をする彼らに対し、元信者の振りをして自分の心を偽り続け、調子を合わせることを強いられる日々。私はついに精神の安定を保つことが困難になり、このまま行くと自分がどうにかなってしまうのではないかという恐怖感に苛まれました。

加えて、本来、監禁されていなければ、今頃は婚約者と幸せな家庭生活を出発することができていたと思うと、募る焦燥感と虚しさで、いてもたってもいられなくなりました。そこで、私は、804号室に監禁されてより間もなく、意を決して覚悟を決め、兄を呼んで座らせ、偽装脱会をしていた旨を伝えました。そして、机を思いっきり叩き「こんな監禁なんてやり方をするあなたの方が悪いんでしょう！」と糾弾し、長い間心の中に無理やり押し込んできた鬱屈した思いを一気にぶちまけました。

私が偽装脱会していたことを表明した結果、私は同室において、家族や後日同室に来訪した宮村等からあらゆる非難、中傷、罵倒を受けることとなり、徹底的な棄教強要を受けるようになりました。804号室にて信仰を維持していることを表明して間もない頃、私は脱出を試み玄関に向かって行きました。ところが、すぐに兄に捕まえられ、足技を掛けられて倒され、取り押さえられました。この時、私は自分で思っていた以上に体力が落ちていたことに驚きました。

玄関ドアに南京錠及びチェーンによる施錠があるだけでなく、力づくで脱出を拒まれたことから、私は同室からの脱出を断念させられ絶望感に襲われました。

(4) 宮村等による脱会説得

監禁されている時、私は自分が今、どこに居るのかさえ知らされませんでした。マンションの移動は夜間に行われたので、なおさら場所の確定は困難でした。一度、兄に「ここの住所を教えてくれ」と尋ねたことがありましたが「必要ない」と一蹴されました。今、私が監禁されていた3か所のマンションの場所と名前と部屋の号数が分るのは、監禁解放後、監禁実行者達を刑事告訴した際の警察官と検察官から情報を得たからです。荻窪フラワーホームの場所が荻窪3丁目付近であることを知ったのは、確か、2003年の衆議院議員総選挙の

際に近くを走る選挙カーから聞こえてきた「荻窪3丁目の皆様、石原伸晃でございます」というウグイス嬢の声によってでありました。

そういうわけで、荻窪フラワーホームに移った直後、自分がどこにいるのか知る由もありませんでしたが、前述したとおり、兄は統一教会を脱会后、宮村峻の経営する広告代理店(株)タップに就職し、荻窪を拠点とする宮村の監禁下での脱会説得活動に元信者の一人として関わっていましたので「おそらくここは荻窪で、この後、宮村が出てくるだろう」と予想していました。このため、1987年、京王プラザホテルに監禁された際、宮村に聞きたくもない批判を聞かされた時の苦しい記憶がよみがえってきて、夜中、夢の中にまでも宮村が登場し苦しめられました。

案の定、1998年1月初旬から同年9月頃にかけて、宮村峻が元信者等を引き連れて804号室に来訪し、棄教強要を行うようになりました。宮村等が同室に滞在する時間帯は午後6時頃から午後8時頃までで、当初宮村は毎日来訪しました。同行した元信者は、●(女)、▲(女)、宮村の会社の従業員(男)、■夫婦、■(男)、■(男)、★(女)といった者達です<注1>。宮村の会社の従業員(男)は、私が1995年9月11日に自宅から新潟に連行された際、自宅の庭に潜んでいて、私に対する逮捕監禁に加担した人物でした。

私ひとりに対し、宮村、家族、元信者等、合計7人～12、3人が私が監禁されていた一番奥の部屋に集まり、彼らは、同室に来訪する度、あらゆる非難、中傷、罵倒を私に浴びせかけました。宮村が最初に同室に訪れた際に「おう、徹くん、久しぶりだね」と言い、私が「いきなり来ますね」と言うと、宮村は「いきなり来ないと君たちは逃げるからな～」と自ら監禁していることを表明するかのような発言をしました。

●は最初に804号室に来た際、不作法にもあぐらをかいて座り、タバコを吹かし、「卑怯者、あの時あんた逃げたでしょ！」などと言って、1回目の時(1987年)私が脱出したことを厳しく非難しました。私は、自由を奪われ人間扱いされない仕打ちに憤り、拉致監禁という許されざる犯罪と人権侵害を行いながらも、全く悪びれない宮村等に対して、「ここから出せ!」、「あんたら、統一教会は人権侵害をしていると言うが、統一教会は人を監禁したりしないぞ!あんたらの方が人権侵害をしているじゃないか!」、「信教の自由を何だと思っているんだ!」と言って激しく抗議しました。

しかし、宮村は、「えらそうなことを言うな。お前に人権を主張する資格などない」、「俺はお前を監禁なんかしてない。家族が保護しているんだ。出して貰いたければ家族に言え」、「お前は全然人の話を聞いていない」、「頭を使え。自分の頭で良く考えろ」、「自分の頭で考えられるようになるまではここから出られないぞ」などと私を愚弄し、「もし自分の子供が

統一教会を辞めなければ、家に座敷牢を作って死ぬまで閉じこめておく」と脅迫し、私に棄教を強要しました。また、宮村や●（女）は、脱会説得の最中、私に対して「馬鹿」、「あほ」といった言葉を頻繁に使い、私を侮辱し続けました。

宮村は、「もし、（教祖である）文鮮明がメシアで（統一教会の教理である）原理が正しければ、おれは、この場で腹を切ってやる。しかし、もし、文鮮明が偽物で原理がでたらめだったら、お前は腹を切る覚悟があるか」と言って脅しつけ、「いったい原理のどこが真理なんだ。説明してみろ。」と言い、私が答えずにいると、統一教会の教理解説書である原理講論や、文鮮明師の説教集である「み旨と世界」を批判し、「こんなものを信じ続けることができるのは、マインド・コントロールされている証拠だ」と言って私を愚弄しました。

また、「統一教会の初期には教祖と信者のセックスリレーが行われていた」と言い、そのことを「血分け」と述べ「文鮮明は、何であんなに女が好きなんだ」、「今まで何人の女と寝たか見当もつかない」等、証拠もなく伝聞に過ぎない、聞きたくもない教祖のスキャンダルを無理やり聞かせ、私は極度の精神的苦痛を受けました。

また、私が「それじゃあ、統一教会に帰って、自分で調べてみるから出してくれ」と言うと、宮村は「だめだ。それに統一教会はいつもウソをつく。どうせ帰ったって本当のことは分らんよ」と一蹴されました。監禁され自由を奪われた上、尊い信仰対象をめちゃくちゃに批判され、心をボロボロにされ、それに対し、自分が得たい情報を自由に得ることもできない、極めて不当な環境の下、私は、「このマンションだけ法律が及んでいない。ここだけ無法地帯ではないか」と嘆かざるを得ませんでした。

また、宮村は1997年の6月22日に父が亡くなったことを指摘して「お前が父親を殺したんだ」、「父親はお前に殺されたんだ」、「どうするつもりだ」と繰り返し私を糾弾しました。そのあまりにも理不尽で心ない詰問に対し、私は、はらわたが煮えたる怒りを覚え「私が殺したと言うなら今すぐ警察に突き出せばいいだろう！さあ連れて行け！」と叫びました。

宮村に同行してきた元信者らも、宮村に同調して私に罵声を浴びせました。▲（女）という元信者は、私と話をしている最中、突然、出されていた緑茶を私の顔面に浴びせかけました。このため私は、着ていたTシャツがびしょぬれになりました。

更に、私の家族も宮村等による棄教強要に加わりました。兄は、私を糾弾している最中に急に立ち上がり、「お前のその態度はなんだ！本当ならぶん殴って半殺しにしてやる所ろだ！」などと絶叫したこともあります。また妹は、「こんな調子だったら一生このままだから覚悟して」などと言って、私を脅迫しました。

また、宮村らが帰ると、その直後から今度は家族等による糾弾が午後9時頃まで続きました。ある時兄は、「お前、ここまで言ってもまだわからんのか、目を醒まさせてやる」と言って、私の顔を平手打ちで叩きました。

また、私が運動不足と気分転換のために屈伸運動をしていると、兄嫁に「こんな時によくそんなことしてられるわね!」と怒鳴られました。私は、なぜ、このくらいのことで怒鳴られなければならないのかと、心が痛みました。

以上の様な、家族及び宮村や●等による、監禁下での人間性を無視した数々の言葉、罵声、暴力による棄教強要によって極度に苦しい日々が続きました。一日の彼らの糾弾が終わると身も心も疲労困憊し、明日もまたこれが続くかと思うと、精神が持たず、破たんしてしまうのではないかと恐怖感が募り言いようのない絶望感に襲われました。そのため、しばしば「私はもういつそのことここで死んでしまいたい」と思うほどでした。

宮村や家族が頻繁に使う言葉に、「お前は全人人の話を聞いていない」「自分の頭で良く考えろ」といった言葉があり、私は監禁中、何百回この言葉を聞かされたか分かりません。私は彼らの話を良く聞いた上で、自分で考えて反論していましたので、「聞いている」「自分で考えている」とその度に反論しましたが、彼らは「いや、聞いていない」「考えていない」と言って頑として受け入れませんでした。

結局のところ、彼らの言う「聞いていない」の意味は、実際には、「お前は俺たちが言う統一教会批判を全然聞き入れようとしなさい」の意であり、また、「自分の頭で考えろ」の意味は、「統一教会信仰の誤りを認めろ」という意味だったのです。即ち、私が彼らの統一教会批判を聞き入れ統一教会信仰の誤りを認めて棄教するまでは、絶対に監禁から解放しない、というのが、彼らの変わらない主張だったのです。

また、兄は「お前に統一教会をやめろと言っているのではない。ただ、家族としては、これほど問題のある団体でお前を活動させておくわけにはいかない。だから、いったんニュートラルになって自分の頭で考えてほしいんだ。統一教会にいては、じっくり考える暇もない。それでも統一教会が真理で正しいというなら、お前には我々に説明する義務がある。あれだけ問題があるのだから当然だ。」とよく言いました。

それに対し私は、「拉致監禁して閉じ込めておいて、ニュートラルになって考えろもないだろ。信教の自由は憲法で保障されているんだ。これこそ拉致監禁、強制棄教だ。」と、反論すると、兄は「これは拉致監禁ではない。緊急避難的保護だ。」と言うので、私が「そんな

はずはない。現に出られないじゃないか。」ほら、といて部屋から出ようとする、兄がすかさず取り押さえ、激しいもみ合いになりました。

そこで私が「ほらみろ。出さないじゃないか。これが、監禁でなくて何だ。これが保護だと言ひ張るのは欺瞞だ。たとえ、家族であっても、こんなやり方は拉致監禁だ。犯罪だ。私が訴えたら皆さんは犯罪人になりますよ。私は皆さんを犯罪人にしたくはない。いい加減にここから出しなさい。」と言うと、兄は、大声で「じゃあ他に、どういう方法があるって言うんだ。教えてくれ」と叫びました。

宮村らが804号室に来始めて間もない頃、インフルエンザが猛威を振るい、私も含め家族のうち何人かがインフルエンザに罹りました。このため私は40度近くの高熱が出て寝込みましたが、医者には行かせて貰えませんでした。そして、インフルエンザに罹った他の家族が病院に行った際、その家族のために処方された薬を私も飲まされました。私がインフルエンザに罹っている間は、感染を恐れて宮村らは来ず、兄は「小休止だ」などと言っていました。私が治ると、直ちに宮村等が来訪し激しい棄教強要が再開しました。私は、この時、高熱にうなされながらも、医者にさえ行かせてもらえぬ悔しさをかみしめつつ、今後、もし、もっと深刻な病気に罹った場合、医者に連れて行ってもらえず、下手をすると死んでしまうのではなかろうかと思うと、恐ろしくなりました。

荻窪に移動して以降の私に対して行われた拉致監禁による脱会説得は、宮村の監督と指導の下で行われたものです。そのことを以下に記します。私がフラワーホーム804号室に監禁され、宮村から脱会説得を受ける1998年の前年の1997年4月1日に「親は何を知るべきか」（いのちのことば社）という書籍が発行されました。宮村は、その本に寄稿し、次のように述べています。

『あなたがもし親であるならば、とてもつらいことですが、「わが子」はもはや昔の「わが子」ではないと知ることです。破壊的カルトが行うマインド・コントロールは、洗脳とは違い、より高度な、より洗練された方法です。本人でさえ気がつかないうちに、操られていく方法なのです。

・・・中略・・・

それよりもっと大事なことは、それ（本人がどれくらいマインド・コントロールされているか）をあなたが判断することは、非常に危険だということです。後でまたふれますが、これはもう、豊富な経験をもつカウンセラーに頼るしかありません。しかし最低限度の基準として、本人が以前と「何か違っている」と思えたら、もうあなたの手には負えないと判断した方がよいでしょう。これはとても重要なことです。

この最初の段階でしっかりしたカウンセラーに相談し、しっかりしたカウンセリングを受ければ何でもなかったことが、「彼だったらきっとわかってくれる」とか「あの子はそんなばかではない」とか「おれが話せばやめる」とか「そのうち目が覚めるだろう」とか「うちの子に限って」とか、あまりにも安易に考えて、多くの家族が事態をさらに深刻にしています。一般的な知識による「まだ大丈夫」は、「もう手遅れ」だと思ってください。

・・・中略・・・

子どもが病気やけがをした時は、たとえたいしたものでなくても、すぐ病院や医者に連れていくのに、心の中でもっと大変なことが起きているのに、どうして自分たちだけで解決しようとするのでしょうか。

・・・中略・・・

ここから先の具体的な行動については、実際の「救出カウンセリング」をお願いする先生を探し出すことです。そしてできるだけいろいろな先生に会い、情報収集と勉強を続けることです。そして、信頼できるカウンセラーを見つけたら、もう迷うことをやめて、その方を信頼することです。あわてず、焦らず、あきらめずに取り組めば必ず解決します。』

以上の宮村の記述によれば、統一教会信者は「マインド・コントロール」されており、信者の両親や家族が「自分たちだけ」で、信者の状況を判断し、解決しようとするのは「非常に危険」であり、もう「信者家族の手に負えない」状態になっている。これを解決する（子供を脱会させる）には、「信頼できるカウンセラーを見つけ、その「先生」を信頼するしかない、ということになります。

宮村のいう家族が頼るべき「信頼するカウンセラーの先生」こそがまさに宮村自身であります。家族は、2回目の監禁で、はじめ新潟の松永に脱会説得を依頼しましたが（拉致監禁の実行には兄ともう1人タップの社員が加わっていたので、最初から宮村も関与していたことは間違いありませんが）、結局、2年以上かけても脱会させることができませんでした。そこで、家族は、父親の死を契機に1回目の監禁で世話になった宮村自身による脱会説得を依頼したのです。

その時の様子について「月刊TIMES」2010年4月号に掲載された「追いつめられる統一教会の悪あがき」と題する記事において、宮村自身が述べています。宮村は、その記事の中で私を説得するようになった経緯を尋ねられ『95年に、家族が後藤徹君と一緒に新潟へ行った。その経緯について、僕は全く知りません。家族が考えて実行したんでしょう。それから2年以上経って後藤君のお父さんから連絡があって、ご両親が上京された際にお会いしました。その時お父さんは、肝臓がんで余命3カ月と言われていて、「このまま死ぬのはたまらん。宮村さん、どうしても徹と話してもらえませんか」とおっしゃったんです。僕は「後藤君が承諾するのであれば話をします」と申し上げました。ご本人が家族と一緒に東

京へ来たのは、それからです。』(p 17)と述べています。ここで、宮村は「家族が後藤徹君と一緒に新潟へ行った経緯を全く知らない」などと言っていますが、これはあり得ません。

当時、兄は宮村が経営する会社タップの社員であり、1995年9月11日の夜、西東京の実家から拉致される時、庭に潜んで拉致に加担した見知らぬ男も、後でわかったことですがタップの社員でした。統一教会信者の脱会説得活動に長年に亘り心血を注ぎ、私たち3人兄妹全員の脱会説得に関わり、最後に一人、信者として残った私をいよいよ説得するという時に、しかも、自らが経営する会社(社員は10人以内)の社員の家族の脱会説得でありながら、「全く知らなかった」などとうそぶくこの宮村の発言に彼の欺瞞性を垣間見ることができます。

こうして松永では脱会させることができなかった「手に負えない信者」の脱会説得を宮村が直接請け負うことになったわけですが、その説得に当たり、宮村を頼りにする家族としては、マンションでの監禁の状態から監禁の解放の時期に至るまで、「信頼するカウンセラーの先生」である宮村の指示を仰ぎその指導を受けていたことは間違いありません。

1998年の2月か3月頃、前記松永が荻窪フラワーホーム804号室を一度訪れました。松永は、宮村と一緒に部屋に入ってくると、私の前に座り、宮村はその少し後ろの私が見える位置に座りました。突然目の前に再び現れた松永を目にして、私は全身に電気が走ったような緊張感と嫌悪感に襲われ、新潟で松永から脱会説得を受けた時の感覚がよみがえってきました。

私が、松永に恐る恐る新潟のマンションで偽装脱会していたことを告げると、宮村が「そんなことをするから(説得が)長引くんだ」といった意味のことを言いました。松永は、「一度、あなたの頭の中を割って、どのような構造になっているのか見てみたいものだ」と言い、まるで私の頭がおかしくなっているかのような表現をして、私をバカにしました。私は、この時、新潟のマンションで松永から脱会説得を受けていた時、たびたび松永から宮村の話聞かされていたことを思い出しました。松永は「統一教会の問題で宮村さん以上に詳しい人はいない」「宮村さんの所に(説得のための)あらゆる資料が集まっている」と言い、宮村を高く評価し信頼していました。

私の兄嫁が脱会説得を受けた時もそうでしたが、宮村と松永は、統一教会信者を説得する場合に連携する事例がよくあることから、私の2回目の拉致監禁脱会説得に当たっても初めから連絡を取り合っていたものと思われま。宮村は、私が一向に説得を受け入れないことから、徐々に同室に来る回数が減っていき、1998年9月を過ぎるとしばらく来なくなり、宮村の下にいる元信者だけが同室に来るようになりました。私は、宮村が同室に来る度に、

『原理講論』という統一教会の教理解説書に「正」の字を書いて回数を記録しましたが、1998年9月頃までの間、宮村が同室に来た回数は全部で73回でした。

なお、宮村と共に来た★という女性は、かつて私と同じ部署にいたことがあり、別途提出の「写真説明書」掲載の写真にも映っていますが（＜中略＞写真3の前から2列目右端）、私が監禁された後に家族等によって連れ去られて脱会させられたのだと思います。

同室では、当初、私が必要とする情報を得ることはできませんでした。私は宮村に「言葉を調べたいので広辞苑を持ってきてほしい」と申し出たことがあります、「だめだ」と一蹴されました。兄は「本当は聖書と原理講論だけで十分だ」と言い、彼らにとって都合のいい情報のみが同室に持ち込まれました。

1999年5月に突然、頼みもしていないのに同室にテレビが入ってきました。しかし、とてもテレビを見る心境にはなれませんでした。そのため、ほとんど自分でスイッチを入れることはありませんでした。

1999年12月、私は世の中のことが分からないまま年月が経過していくことに著しい不安感を感じ、家族に対し、『現代用語の基礎知識』を持ってくるよう要求しました。ところが、この要求を拒否されたため、家族等との間で激しい言い合いとなりました。私が激怒して、「畜生、出てやる、ここから飛び降りてやる」と言って奥の部屋の窓に突進したところ、窓の内側の障子が破れ、障子のサンが折れました。これに家族は怯んだのか、2000年1月、『現代用語の基礎知識』を同室に持ってきました。また、この頃から産経新聞を私に支給するようになりました。その後新聞は、産経新聞から東京新聞に変わりましたが、2006年6月頃からは東京新聞も支給されなくなりました。

『現代用語の基礎知識』や産経新聞により世の中の情報を知れば知るほど、私はマンションの1室に監禁された状態で世の中から隔絶されてどんどん取り残されていくことに極度の不安を感じるようになりました。そして2001年2月になると、私は「このままでは、世の中から隔絶されたまま一生ここから出られない」との抑えがたい不安感に襲われました。このため私は玄関目がけて突進し、脱出を試みるようになりました。そして家族から取り押さえられる度、私は力の限り近所中に聞こえるくらいの大声で、「出せ」「助けてくれー」「警察を呼べ」と何度も何度も繰り返し叫び、命がけで脱出を試みました。

そして家族に対しては、「統一教会は人権侵害をしているというが、あんたらのやっていることの方が人権侵害じゃないか。統一教会はこんな風に人を監禁したりしないぞ！」「これは拷問だ！」「現代の魔女狩りだ！」「一体何回選挙権を奪ったと思っているんだ！」「こん

なことが許されると思っているのか？あんたらのやっている蛮行は必ず白日の下にさらしてやる！」「弁護士を立てて訴えてやる！」「そっちが犯罪者になるぞ！」と言って糾弾しました。

しかし、私は兄、妹、母によって取り押さえられ、はがいじめにされ押し倒されました。家族は私の助けを求める叫び声が近所に聞こえるとまずいと思っただけで、布団で私をくるみ、口を押さえつけました。このため、私は息が出来なくなり、窒息しそうになることもありました。長期監禁によりほとんど運動する機会がなかったために全身の筋力がガタ落ちしており、この頃私は、兄と一対一で揉み合いになっても簡単に押し倒され、羽交い締めにされてしまいました。更に妹と母が女性であるにもかかわらず半狂乱になり、まるで何かに取り憑かれたごとく怪力を発揮したため、私は3人から押し倒されると全く歯が立ちませんでした。

こうした揉み合いにより私は顔や手足から出血して血だらけになり、体中アザだらけになり、着ていた上着はボロボロに破られました。手足からの出血は畳にもしたたり落ち、私はタオルで手や畳を拭きました。また、夜は体中が痛み、寝ることができませんでした。私は風呂に入るとき、アザだらけになった体を兄に見せ、「これを見ろ、ひどいじゃないか！」と激しく訴えましたが、兄は、「俺もそうだ」などと言って私の訴えを相手にしませんでした。私はこうした揉み合いの最中、右手薬指を捻り、骨が曲がってしまいました。この時は激痛が走り（おそらく骨折したものと思われる）、この痛みは2～3ヶ月間ほど続き、現在も指が曲がったままになっています。

また、こうした揉み合いの最中、家財が随分と損傷しました。私は、家族等から押し倒されまいとして台所の柵（数本の金属棒で構成されている柵）の金属棒や、中央の部屋と玄関前の部屋との間のアコーディオンカーテンにしがみつきましたが、家族等が無理矢理私を引っ張ったため、台所の柵の金属棒は変形し、アコーディオンカーテンは破れました。

この時期、兄は、添付の荻窪フラワーホーム804号室間取り図のAの部屋に常駐して、私を監視し続けておりました。私が隙を見て、Bの部屋まで行き、木戸（図のD）のノブをガチャガチャと回して脱出しようとしたのですが、私がいくらノブを回しても、押しても引いてもドアは開きませんでした。

そして、C地点に兄が立って、「まったく油断も隙もなかったもんじゃない」と言いました。この兄の言葉はすなわち、「木戸（図のD）を施錠することによって、お前が隙を見て逃げようとするのを阻止できてよかった」という意味であることは明らかです。すなわち家族等は、この頃の私の実力行使による脱出に対する対抗策として、私が脱出することを阻止するため

に、玄関だけではなく、図のDの木戸までも施錠して開閉できないようにし、私が玄関にたどり着くことすら阻止したのです。

私は、こうした激しい抗議行動を約1ヶ月間に亘って繰り返しましたが、この間、宮村が804号室に2度来ました。最初に来たのは私が抗議行動を起こした最初の日で、私が脱出しようと玄関に向かって行ったとき兄はすぐに私を取り押さえると、妹に「おい」と言って目配せし、妹に携帯電話で電話を掛けさせ、宮村を呼びました。宮村はすぐに804号室に駆けつけ、私が兄によって取り押さえられ、床に押しさえつけられているのを見ると、私の顔のすぐ前に歩み寄り、「いったい何をやっている！騒ぐな！」と怒鳴ると、しばらく様子を見て帰りました。この兄と妹が素早く携帯電話により宮村を呼んだ一連の行動と、その後、すぐに宮村がマンションに現れたことから、マンション内で何かあったらすぐに宮村に連絡をするように前もって家族と宮村の間で打ち合わせがなされていたことがはっきりと見て取れました。このことより、私に対してなされた棄教目的の監禁による脱会説得は、家族の背後に宮村がいて、常に家族から連絡を受け、家族は宮村の指示に従って行動していたことは間違いありません。

2回目に宮村が来たときは、私が風呂場の浴槽によじ登り通気口に口をあてて「誰か聞いてますかー、ここに監禁されてまーす！、警察を呼んで下さーい！」と助けを求め叫んでいた時でした。おそらく家族から通報を受けた宮村が、突然、風呂場に入ってきて、後ろから私の襟首を掴み、私を浴槽から引きずり落とし、風呂場から引きずり出し、奥の部屋まで引きずっていきました。その時、私が引きずられまいとしてキッチンにあった電化製品を掴んだため、それらがなぎ倒されてしまいました。奥の部屋に力づくで無理やり引き戻された後、私は、怒りのあまり、両手の握りこぶしで机をガンガン叩き、「ふざけるな！いい加減にここから出せ！」と叫びました。それに対し、宮村は、「こいつは駄目だな」とつぶやいて部屋を出て行きました。

私は、どんなに力づくで脱出を試みても取り押さえられる上、更に嚴重な監禁状態になってしまったことから、言いようのない虚脱感と絶望感に襲われるようになりました。そして、外の景色も見えない針金が入った曇りガラスから入ってくる光をぼんやりと見つめつづけることもありました。この現実を受け止めることがあまりにもつらく、また耐えがたく、このままでは、ついに自分を失い、発狂するのではないかという恐怖におののきました。そして、とうとう、抗議する気力さえも失せてしまい、遂に力づくでの脱出を断念せざるを得ない心理状態に追い込まれました。

一方、この頃、こちらから要求もしないのにビデオテープ、イヤホン、卓上電気スタンドなどが、ベランダに面した部屋に持ち込まれました。また、あらゆるジャンルの書籍を兄が持

ってくるようになりました。私は、この頃、あまりにもつらい、受け入れ難い当時の状況から逃れるため、兄が持ってきた書籍を貪るように読みました。また、イヤホンを持ってきたのでテレビも見るようになりました。それらにより、一時的に悲惨な現実を忘れることができましたが、しかし、鬱屈した思いが晴れることは決してありませんでした。

この頃以降、私が2004年4月に第1回目のハンガーストライキを執行するまでの間、家族等による脱会説得は殆どなくなりました。また、宮村及び元信者等は804号室に来なくなりました。今にして思えば、長期監禁に対し後日私が彼らを訴えることを恐れたのだと思います。監禁から解放されてより後に知ったことですが、実に前年の2000年8月には、宮村と懇意にしているキリスト教神戸真教会の高澤守牧師が、同牧師によって逮捕監禁、脱会強要の被害を受けた統一教会信者から訴えられた民事裁判で敗訴していました。

また、同室にて脱会説得活動を殆どしなくなったにもかかわらず彼らは私を804号室に留置し続けましたが、これも、私を解放した場合、私が彼らを訴えることを恐れたためだと思います。即ち家族や宮村等は、自分達の犯行が明るみに出ることを恐れ、口封じのために私を監禁し続けたのです。私が「弁護士を立てて訴えてやるからな!」「そっちが犯罪者になるぞ!」と言って彼らを糾弾したことが、彼らにとっては相当の脅威となったようです。

この頃、私は、監禁から解放されるために“投げ文”を思い付き、ノートのページを破り、それに「私は後藤徹といいます。私はこのマンションの高層階に監禁されています。これを拾った方は統一教会に連絡をして下さい。謝礼をさしあげます」と書いたことがありました。しかし、いざ、実行しようとした時、補強用針金の通ったガラス窓は、そう簡単に割れるものでもなく、また、うまく落とせたとしても、ばれた場合、その後、どんな仕返しを受けるかもしれないと思うと躊躇せざるを得ませんでした。すでに、ドアに近づくだけで力づくで押さえ込まれ、さまざまな暴力を受け、けがをしてきたことが思い出され、気持ちが萎えてしまいました。迷った末、結局、その紙は破って、便所に流してしまいました。私は、絶望感に打ちひしがれ「ここで一生過ごすことも覚悟しよう」と思ったりもしました。

2001年9月12日、1987年の第1回目の脱会説得の際、私と会ったことがあるという脱会説得の専門家(男性)が1日だけ804号室に来て脱会説得をしました。この男性は翌日も来ると言って帰りましたが、その日以降、同室には来ませんでした。

(5) ハンガーストライキの執行(第1回目21日間)

2004年4月、私は、いよいよこのままでは一生監禁されたままで終わるのではないかとの抑えがたい不安感と恐怖心に襲われました。しかし、2001年2月にはどんなに私が脱

出しようとしても取り押さえられた経緯があったことから、今度は方法を変え、遂に私は21日間のハンガーストライキを執行し、長期監禁に抗議しました。

私は家族に対して、「もう8年だぞ！当時生まれた人間はもう8歳だ。こんなに閉じこめて人権侵害だ！」「30代というのは人生で最も気力体力が充実している時だ。それを社会から隔絶された所に閉じこめられてまるまる奪われたんだぞ。どうしてくれるんだ」「一体何回選挙権を奪ったと思っているんだ！」「これを人権侵害と認識できないというのは、あんたらの考え方がよほど狂っている。何でそれがわからないのか。それこそ非常識じゃないか」「これは拷問だ！」などと言って抗議しましたが、家族等は「全く人の話を聞こうとしない」「自分の頭でよく考えろ」などと言って私を糾弾し、私に棄教を強要しました。

兄嫁は私を激しく非難する中で興奮して半狂乱になると、畳の上に座っていた私の目の前に正座して座り、全身の力を振り絞って平手打ちで思いっきり私の顔を叩きました。そして興奮して私を非難し続け、しばらくすると再度同じように思いっきり私の顔を平手打ちで叩きました。多いときはこうして4～5回は平手打ちで私の顔を力一杯叩きました。兄嫁は水泳をしていたことがあり、筋肉質で体格が良く、私は叩かれる度に上体が大きく揺れました。このため私は顔面が常に痛みました。ある時、兄嫁も手のひらを痛めたらしく、長期間に亘って右手親指の付け根に湿布を貼っていました。このような暴行が、私がハンガーストライキを始めた4月から始まり、9月に至るまで頻繁に繰り返されました。

また兄嫁は、私をいじめ抜きました。兄嫁はある時、「いい加減に目を覚ましなさいよ！」と興奮して叫びながら私の襟首を引っ張り、背中に氷水を流し込みました。また、兄嫁は、私がハンガーストライキを終えて食事をしている最中に、私の目の前に電気スタンドを置き、そこに私を茶化す絵を貼りつけて、「これを見ながら食べろ！」と言って私を愚弄し続けました。その紙には、私が座禅している姿が描かれ、その下に「真理を追求する男、私の名は徹」との注釈が書き加えられていました。兄嫁による、このような逃げ場のない監禁下での暴行や虐待は、私にとり極めて耐えがたく、兄嫁の気配を感じただけで、恐怖を覚え、動悸が激しくなり、体が硬直するようになりました。これに加えて兄嫁は、「性根の腐った人間に人権などない」と暴言を吐き、虐待を正当化しました。

ハンガーストライキも後半になると体はフラフラになり、歩くのも身動きするのも大変になったため、横になることが多くなりました。トイレに行くのも大変で、トイレで何度か倒れそうになり、立って用を足すことができなくなりました。

21日間に亘るハンガーストライキ後、約1ヶ月かけて重湯からお粥、お粥から普通のご飯へと戻していき、普通食に戻しました。この間も、最初は体がフラフラでした。ハンガース

トライキ中、一番痩せていたときは、飢餓状態の人のようになりましたが、約1年かけて元の体重に戻りました。

(6) ハンガーストライキの決行 (第2回目21日間)

2005年4月、私が韓国語を勉強するための教材を持って来るよう家族に要求したところ、兄嫁及び妹がこれを拒否し、激しい言い合いになりました。私は調理用の金属製ボール2つを叩き合わせたり、ボールで冷蔵庫等を叩き回って抗議しましたが、家族は頑として私の要求を聞き入れませんでした。そこで私はこの言い争いをきっかけに、長期監禁に抗議して第2回目のハンガーストライキを21日間決行しました。

すると家族等は、ハンガーストライキが終わっても粗末な食事しか出さず、食事制裁によって私を虐待し、棄教を強要しました。私が兄嫁に、「1回目のときは1ヶ月で普通食に戻したのに今回は何でこんなに長いのか？兵糧攻めか？制裁のつもりか？」と言って抗議し、「いつ普通食に戻すんだ？」と聞くと、兄嫁は「それは分からない」と言ってとぼけました。結局、粗末な食事しか出さないことによる虐待は7ヶ月間続きました。このため、体が思うように動かずフラフラの状態が長く続きました。

私は荻窪フラワーホーム804号室に監禁されていた最中、右足の親指に水虫を発症しました。私が薬を要求したところ、最初は家族は薬を支給してくれましたが、2006年頃からは要求しても薬を支給してくれなくなりました。このため、右足親指の爪が解放後も約1年間変形したままとなりました(写真1)。同室では何故か家族全員、目が疲れ易くなり、私も含め皆が目薬を投与しましたが、私に水虫薬が支給されなくなったのと同じ頃から私にだけは目薬が支給されなくなりました。このため、私は目がとても疲れやすくなりました。

2005年終わりか2006年の初頭頃、私が使用していた電気スタンドの電球が切れました。私が家族に対し、新しい電球と取り替えるよう要求しても、家族は新しい電球を支給してくれませんでした。

(7) ハンガーストライキの決行 (第3回目30日間)

2006年4月、私が家族にノートを持って来るよう要求したところ、兄嫁及び妹がこれを拒否し、またしても激しい言い争いになりました。そこで私は、今度は以前にもまして長期のハンガーストライキを決行しない限り監禁から解放されることはないと思い、3回目は、監禁から解放するまでの無期限のハンガーストライキを決意しました。

断食を始めてから2週間を過ぎる頃には、立ち上がることも難儀になり、本を読んだり、ものを考えることすら困難になって、日中もぐったりと体を横たえることが多くなりました。すでに2回経験した21日を過ぎると、いよいよ体が衰弱してきて、このまま続けると危ないということが感覚的に分かってきました。私は命の危険を感じ取り30日を区切りに、「これで断食を終わる」と家族に伝えました。ところが、家族は私の反抗的な態度に激怒し、私がハンガーストライキの終了を宣言しても丸一日、重湯等の食事を出しませんでした。

私は飢餓状態で体がフラフラであったため、「殺す気か!」と言って抗議しましたが、家族は「お前は何を言っているんだ。そっちで勝手に断食しておいて勝手に食事を出せとは何事だ!」「馬鹿じゃないのか!」「死ぬまでヤレ!」と言って頑として食事を出しませんでした。このため私は、「このままでは本当に殺される」と思い、大変な恐怖心に襲われました。

そこでしかたなく、平身低頭して食事を出すよう頼まざるを得ませんでした。私が頼み込んだ末、家族はようやく翌日から、直径7センチ深さ5センチほどの丸い小鉢に7分ぐらいの分量の重湯を一日3回とポカリスエットを薄めたものを出すようになりました。但し、ポカリスエットは1日に500CCを2回のみでした。しかも妹は、機嫌が悪いときは、ポカリスエットを支給する時間を数十分遅らせました。わずか数十分の遅れですが、この仕打ちは飢餓状態だった私の身体にはとてもきつく、私は家族のいいなりになりました。

最初に重湯が出された日の朝、私が他の家族の食事が見えない位置に座って重湯を飲もうとすると、兄嫁はテーブルの上をバンと叩き、私に対し「ここに座りなさい!」と言って食卓全体が良く見える位置に座よう強要しました。私は、再度重湯を出さないことによる虐待を受けることを恐れ、兄嫁の横暴な要求にもかかわらず、指示された位置に座らざるを得ませんでした。こうして兄嫁は、ただでさえ飢餓状態にある私に彼らの食事を見せつけ、更なる精神的苦痛を与えました。この時の屈辱は、忘れることができません。

このような流動食のみの食事は、その後70日間にも亘って続けられ、固形食は出されませんでした。このような流動食では何も食べていないのと同じで、30日間ハンガーストライキをした後、引き続き70日間に亘って断食を強要されたのと同じことになりました。このため体は痩せこけ、餓死寸前の人のようになりました。私はこの間、餓死する恐怖に直面し、体力的には最もきつい状態が続きました。

この70日間は、家族と食卓を共にしながらも、私の食事だけは毎食、重湯の小鉢だけがぼつんと目の前に出されるだけでした。その小鉢を手に取り、一気に飲むと数秒で終わってしまうので、家族が食事する様子を眺めながら、少しずつそれをすすると、それでも3分ほどであっけなく食事は終わってしまいました。

この間、「このままでは死ぬかもしれない、もう危ない」と危機感を抱いた私は、家族の目を盗んで、半ば衝動的に台所の冷蔵庫の扉を見つからぬようにそっと開け、そこからマヨネーズや調味料を抜き取りむさぼるようになめていました。ところが、ある日、同じように冷蔵庫を開けて見ると、なんと、調味料があとかたもなくすべてどこかに隠されてしまいました。

私は、餓死の恐怖に駆られ、その後、捨てた生ゴミの中から、ニンジンの皮やリンゴの皮をそっと抜いて、隠れて食べました。リンゴの皮に少し残った実の部分をかじり、そのリンゴの甘さが口の中に広がると、あまりの嬉しさに涙が流れてきました。しかし、それもいつ見つかったのか分かりませんが、生ゴミまでも隠されてしまいました。

この間、私は空腹の余り意識は時に朦朧となり、どこからともなくきれいな音楽らしきものが聞こえてきて、それが、幻聴であることがしばらくして分かりました。私は、「あの世からの迎えが来ているのかもしれない。このままではもう本当に危ない」と思い、今度は炊飯前の水に浸した生米に目を付けました。そして、見つかるのではないかとひやひやしながら、生米だけを少し抜き取って、それを隠れてかじりました。

家族は元々の米の量にちょうど合った計量の水で米を炊くため、相対的に水の量が、少し多めになりました。そうすると、炊きあがったご飯の水気が多くなり、これが、毎日続くので、家族は炊き上がったご飯を食べながら、「なんか最近、水気が多いなあ」と怪訝な顔を見せました。私は、平静を装いながらも、心の中で「ああ神様！なんとかばれないようにしてください！」と必死に祈っていました。もし見つければ、この上、どんな制裁が待っているかと思うと気が気ではありませんでした。

炊き上がりの水っぽいご飯が連日続く中、結局、家族は「この炊飯器は壊れた」と言って炊飯器を取り換えました。こうして、米を抜き取って食していることは奇跡的に見つかることがなかったので、私は何とか餓死を免れました。私も家族等がここまでやるとは本当に予想外でした。

私は、監禁中に読んだ新聞のコラムで、かつて1980年代にアイルランドの反政府勢力（IRA）の20代の若者達が、40日間ないし70日間のハンガーストライキによって複数死んだことが取り上げられていたのを読んだことがあったため、自分も、30日間のハンガーストライキ後、わずかな流動食しか出されないまま、いつばれるかもしれない米を抜き取って食している状態がこのまま続いたのでは生命の危機に瀕するのではないかと危惧し、同年7月上旬頃、家族に対し、食事を戻すよう頼み込みました。

これに対し、兄は、このまま私が死んだ場合、殺人罪に問われることを恐れたのか、他の家族に対し、「もうそろそろ食事を元に戻してもいいのではないか」と提言しました。これを聞いた兄嫁は、「えー、信じられない！」と言って無然とした表情でいかにも残念そうに言いました。このやり取りを見て、兄嫁が私が棄教するまで、場合によっては死に至りかねない非道な食事制裁を続けるつもりであったことが分り恐ろしくなりました。頑強に棄教を拒否し続ける私へのヒステリックな憎しみを兄嫁が持っていることは常々感じていましたが、そのヒステリーが高じて私の命をも軽視するその冷酷さには背筋が凍る思いがしました。

食事を元に戻すといっても、最初の4ヶ月間は、重湯が三部粥に、三部粥が七部粥にと徐々に変化し、普通のご飯等が出るようになったのは4ヶ月経ってからでした。しかもその後も、朝はパン1枚に飲物1杯、昼はご飯1杯、味噌汁1杯、のり4枚、漬け物と小魚少々、梅干し等、夜は、ご飯1杯、味噌汁杯、漬け物、小エビ、納豆といった、おかずらしいおかずがない粗末な食事しか出されず、このような食事が最後まで続き、その精神的・肉体的苦痛は過酷を極めました。他の家族は通常通り普通食を食べていましたが、私は、家族と同じテーブルを囲みながらも毎日、直径10センチほどの小皿に乗った、上に記した漬物など同じものしか食べることができず、目の前で家族が食べている普通のおかずをのどから手が出るほど食べたい思いでした。

しかも兄嫁は、私にだけ出されている粗末な食事を指して、「ものすごく豪華な食事だ」などとあべこべなことを言い、私を人間扱いしませんでした。食事が終わった後も、家族だけは玄関に近い部屋で、デザートにフルーツやお菓子を食べていて、食事の量が少なかったため、食事をした直後も空腹であった私は、その匂いにとっても敏感になっていて、とても耐えがたく、時々、残飯からリンゴの皮を抜き取って食していました。

夜、床に就くと、カレー、かつ丼、餃子、ラーメンなど、食べたくても食べられないメニューが次々と思い浮かび、空腹のため、なかなか寝付くことができませんでした。

同年9月、安倍政権誕生がニュースで報じられていた頃、部屋の掃除をしていた妹が、私がビデオデッキで使用していたビデオテープをいきなり取り上げて持って行こうとしました。私がこれを奪い返そうとしたところ、妹と揉み合いになり、ビデオテープは妹によって破壊されてしまいました。また、妹との揉み合いの最中、兄嫁が部屋に入ってきて、テレビのアンテナケーブルを取り上げてしまいました。私は体力的に妹1人に対しても全く太刀打ちできなかったため、兄嫁がテレビのアンテナケーブルを持って行くことに対しては、これを阻止する気力すら湧いてきませんでした。この日以来、再度私はテレビもビデオも見ること

ができなくなってしまう更なる精神的苦痛を受けました。妹は、804号室での監禁年数がかさむに連れて、私をぞんざいに扱うようになっていましたが、兄嫁と妹は、私がテレビを見ているのがとても気に入らなかったようです。

また、ある日、兄嫁が私の書籍を勝手に部屋から持ち出そうとしました。そこで、返して貰おうとして玄関前の部屋まで行ったところ、兄嫁から「こっちに来ないでよ」と激しい口調で言われ、アコーディオンのカーテンを越えて玄関前の部屋に入ることを禁止されました。当時は更に貧しい食事による食事制裁を加えられることに対する恐怖感があったため、兄嫁の言いなりになるしかありませんでした。

3度目のハンガーストライキを行った後だったと思いますが、家族は何度か、「もう出て行ってもいい」といった意味のことを言ったことがありました。しかし、私は、そのような言葉を聞いても、それまで家族が私の脱出を阻止するために行ってきた暴力や食事制裁などの虐待の経験から、家族が本気で言っているとは到底思えませんでした。むしろ、後日私が家族を訴えた際、監禁との非難を免れるためのアリバイ作りとして、わざとそのようなことを言っていたとしか思えませんでした。

同室には、外部の業者（エアコンの修理など）が訪れた時が何度かありました。私は、それらの人々に助けを求めることも考えましたが、以下の理由により、助けを求めることができませんでした。

第一に、外部の業者が訪れる時には、必ず兄が業者の作業の見える位置にいて、常に私を監視していました。兄が凝視している中で、業者に助けを求めることは、私にとり極めて困難でありました。

第二に、2000年の夏にエアコンの修理をしに来た男性いましたが、その男性が兄と会話している中で、宮村の知り合いであり、宮村や家族と通じている業者であることが分かりました。そのような業者に助けを求めることはできず、また、他の業者も宮村や家族と通じている可能性を思うと、助けを求めることができませんでした。

第三に、私は、フラワーホーム804号室に移って以来、閉ざされた空間の中で、宮村や元信者、家族から多くの精神的、肉体的虐待を受けてきました。それは、今まで述べてきたことですが、例えば、一人に対し大勢で行われる悪口、中傷罵倒、非難による、死にたくなるほどの精神的苦痛、実力で脱出を試みる時、暴力によって取り押さえられることによる肉体的苦痛、監禁に対する抗議のハンスト（21日間2回と30日間）の後の過酷な食事制裁などです。これらの過酷な虐待の経験から虐待に対する恐怖心がつのおり、助けを求め、

失敗した時のことを思うと、業者に対してもヘタに声を掛けることができませんでした。

(8) 監禁からの解放

2007年11月頃になると、兄嫁は私に対して、「あんたこの部屋を維持するのにどれだけお金が掛かっていると思っているの」と言って私を非難し、2001年2月に私が約1ヶ月間に亘って804号室からの脱出を試みては家族らから取り押さえられるということを繰り返した際、台所の棚やアコーディオンカーテンが壊れたことに関しても、「あんただれだけこの部屋を壊したら気が済むの？部屋を出るとき、全部リフォームしないとイケないのよ」と言って私を非難しました。もはや家族等は、804号室での監禁を継続することが経済的にかなり苦しくなりつつあるようでした。また、万一私が再度ハンガーストライキをして死ぬようなことにでもなれば、もっと面倒なことになるという危機感が、彼等を襲っていたと思いますが、この頃から、私を監禁している家族の間でも、監禁をこれ以上継続するか否かで意見が分かれ始めたようです。

2008年1月頃、私は自分の髪を切るため鏡を貸すよう要求し、妹がいた玄関前の部屋の近くまで行きました。すると妹が、「入ってこないでよ」と激しい口調で言い、両手で私の胸辺りを強く押して突き飛ばしました。このため私は身体がよろけて数歩後退し、背中から食器棚にぶつかりました。当時の私の体力はこの程度のものでしたが、それでも私を監禁中の殆どの期間、家族は、何か用事があっても最低2人は804号室に残るようにし、私に対する監視を怠りませんでした。例えば、2006年4月3日か4日のことだったと思いますが、母方の祖母が亡くなったため、常時監視をしていた母と妹が山形県米沢市の祖母の家に葬儀に出かけたことがありました。この時は、兄嫁に加え、兄がわざわざ会社を休んで私の監視に当たりました。これは、監視が兄嫁一人になってしまうため、それを補充するための行動であったと思われる。

同年2月10日午後4時頃、兄夫婦、母、妹の4人が私に対して「統一教会の間違いを検証する気がないんだったら即刻出て行け！」と言って804号室からの退去をいきなり命令してきました。当時の私は、断食後の1年10カ月に亘る食事制裁と運動不足、また、監禁が長くなるにつれての絶望感、虚無感、そしてあらゆるものを失った喪失感のため、心身とも著しく衰弱し、また、12年以上も社会との断絶を余儀なくされたため、行くあてもなく、監禁から解放されたとしても、路頭に迷いホームレスにでもなりかねない、そんな状況でありました。そのため私は、家族に対し「それなら少しでもお金をください。そうでないと電車にも乗れないでしょう」と言って家族に頼みました。それに対し、兄は「ダメだ」と拒否しました。

長年に亘る拉致監禁により、貴重な時間とあらゆる機会を奪っておいて、その上、自分たちの意にそぐわなければ一文無しで出て行けという、そのあまりにも理不尽な扱いに私は大変憤り、「12年間も監禁しておいて無一文で追い出すなんて酷いじゃないか！」と言って激しく抗議しました。すると揉み合いになり、家族等は力づくで私を追い出そうとしました。そこで私は、台所の棚やアコーディオンカーテンなど至る所にしがみついて抵抗しましたが全く歯が立たず、担ぎ上げられ、普段着に靴下のまま玄関から無理矢理外に押し出され、玄関前のコンクリートの廊下部分に背中から押し倒されました。

私が仰向けになったまま起き上がれずにいると、兄が玄関の中で「靴、靴」と言い、その後、家族の誰かが私の革靴を投げつけてきました。この後玄関ドアが閉められ、鍵が掛けられました。この時の揉み合いで、私は手の甲や手首から出血し、セーターは破られました。余りの仕打ちに玄関ドアを叩きつけ大声を張り上げてしばらく抗議したところ、兄が玄関の内側から「うるさい」と叫びました。

私はやむなくエレベーターで下に降りました。1階に下りると集合ポストがあり、804号室のポストには名札入れのところに、GOTOとローマ字で書いた紙片が貼ってありました。また、1階玄関から外に出た際、同マンションが杉並区荻窪3-47-15の荻窪フラワーホームであることを確認しました。

ようやく自由の身になれたとはいうものの、体力的に衰弱した中、所持品も着替えもなく、仕事も生活の宛ても無く、かつての知り合いがどこにいるかも分からない中で、一体これからどうやって生きていったらいいのかという不安が襲ってきました。そして、荻窪近辺の統一教会の場所が分からなかったため、私は歩いて渋谷にある統一教会本部に向かいました。

青梅街道を東にしばらく歩くと交番（成宗交番杉並区阿佐谷南 3-12-2）が見えたので、ここに入り、「この近くの荻窪フラワーホームというマンションに監禁されていて、先ほど解放されました」と言って、つい先ほどまで監禁されていたことを訴えました。

私の言葉に、警察官は最初驚いた様子でしたが、私が、統一教会の信仰を棄教させるために家族が拉致し監禁したという事の顛末を話すと、警察官の態度が急に変わり、訝しげにものを見る目になっていきました。いくら説明しても「親が一緒だったんでしょ」「食べ物も食べてたんでしょ」と、まともに対応されない中で、私は、「これはダメだ。まるで話にならない」と思わざるを得ませんでした。そこで、せめて電車賃ぐらいは借りたいと思い「とにかく一文無しなので、お金を貸してくださいませんか」と頼みました。すると、東京に知り合いはいないのか、などと聞かれ、私は、「いや、だから12年もマンションに監禁されていて、そこから出てきたのだから、頼るところはないし、・・・」と言うしかありませんで

した。結局、身元不詳ということで、それも拒否され、仕方なく目指すことにした渋谷方面への行き方を略図で書いてもらい、それを握って再び歩き始めました。

荻窪フラワーホーム804号室では、食事制裁を受ける中、常に空腹状態で苦しいながらも、運動不足を解消するため、一日15分は簡単な運動をしていましたが、このことが幸いしてか、しばらくは歩くことができました。途中のラーメン屋やドーナツ屋の横を通るたび、その匂いがたまらなく、そこに入って、腹いっぱい食べたい衝動に駆られました。一文無しではどうしようもなく、先を急ぐしかありませんでした。青梅街道から中野坂上の交差点を右折して山手通りに入ると、遠くに久しぶりに見る新宿の高層ビル街が目に入り「ああ、ようやく自由になれたんだ!」、と解放された実感がわいてきました。

しかし、長年歩いていなかったせいで、渋谷区に入った辺りから、両膝の下が急に痛くなり始め、更に初台の辺りまで来ると、膝ががくがくしてきたため、前屈みになり膝に手を添えて歩くようにしました。しばらく進むと道端に木の棒が落ちていたのでこれを杖の代わりにし、非常にゆっくりとしたペースで少しずつ前進しました。

「本部が閉まってしまわないうちに行かなければ」と焦りながらマンションを出て4時間くらいかけて漸く渋谷区松濤2丁目の交差点まで来ましたが、遂に膝の激痛のため一歩も歩けなくなってしまいました。しかも夜になりこれ以上どちら進んだらいいのか、道も分かりませんでした。その時の私の姿は、上は、もみ合いの時に破れたセーターに下は着古したジャージ、靴は皮靴、髪は自分で刈っていたので、ざんぎり頭でした。その上、杖をついて歩いていたので、一見ホームレスにしか見えず、また、一年の内で一番寒い時期だったので「このままだと、ここで凍死するかもしれない」とふと頭をよぎり、この時、私は殉教も覚悟しました。

しかし、「最後まで、這ってでも行けるところまで行こう。」と決意し、思い切って通行人に統一教会本部への道順を尋ねました。すると、2人目に声を掛けた通行人の女性がたまたま帰宅途中の統一教会信者でした。

私は、この奇跡的な出会いに驚き、偶然であったとはいえ、天の助けを感じ、感動でうち震えました。その女性に事情を説明すると、親切にも道順を教えて下さいましたが、私がもはや歩行困難であることを告げると、タクシーを拾って下さり、タクシー代として千円を出して下さいました。

監禁下で人間扱いされなかった私は、久しぶりに人の温かさに触れ、とめどなく涙が流れてきました。こうして私は、何とか生きて本部教会に辿り着くことができました。

本部教会で夜間受付の男性に事情を説明したところ、12年間監禁されていたという話をにわかに信じて貰うことができず、最初は不審者と間違われ相手にして貰えませんでした。しかしその人が、拉致監禁問題に詳しい人に電話で連絡をとったところ、確かに「後藤」という男性信者が長期監禁されているという情報を高澤牧師の監禁から逃げ帰った信者が伝えてくれたことがあるということで、信じて貰うことができ、建物の中に入れて貰うことができました。

本部で夕食を出して貰い、この日は1階の奥にある和室で泊めて貰うことになりました。ところが、就寝する頃、トイレに行こうとしても這ってしか行けず、トイレまで行っても用を足せない状態になっていました。このため、「何かあったらいけない」ということで、夜中の0時頃に教会本部からタクシーで豊島区北大塚の一心病院まで送って貰いました。一心病院で夜間診療を受けたところ、栄養失調と診断されました。また、歩行不能であったため、私は同病院に緊急入院しました。

その後の診察、検査により栄養失調の他、全身筋力低下、廃用性筋萎縮（筋肉を使わないために筋肉組織が退化して小さく弱くなった状態）、貧血と診断されました。

6. 入院後の経緯

2月11日（午前2時頃）に一心病院に入院した頃は、立とうとすると膝の骨に激痛が走るため、独力での歩行ができない状態が続き、2月下旬頃まで車椅子を利用しました。その後、歩行器を利用するようになり、3月4日頃から松葉杖と歩行器を併用するようになりました。3月10日頃になると、杖を使用するようになりましたが、階段を自由に上り下りできるまでには回復しませんでした。

3月20日頃になると杖を使わずに歩けるようになり、ゆっくりであれば階段を上り下りできるようになりましたが、長時間の歩行はまだできない状態でした。このためリハビリを継続し、3月31日に退院しましたが、その後しばらくは走ることもできず、早歩きをしようとしてもしづらい状態でした。また、徒歩で30分くらい買い物に出ただけで膝や足首に痛みを感じ、翌日は、ももやふくらはぎに筋肉痛が残りました。

座るときは、あぐらはかけましたが、足首に痛みがあるため正座はできませんでしたし、監禁解放から3年以上たった今も正座をすると足に違和感を感じます。また、退院後しばらくは、あぐらの状態で立ち上がろうとしても、手を床につくなどして体を支えないと足の力だけでは立ち上がることができませんでした。12年間に亘る長期監禁と、2月10日の脱出

時に膝を痛めたこととが、退院後も、身体に重大な影響を及ぼしていることを強く感じました。

一心病院に入院して2～3日後、胃腸炎を起こし、しばらく下痢が続きました。これも、長期監禁により内臓の抵抗力が弱っていたためだと思います。12年5ヶ月に亘る監禁中、外の景色を見る機会が殆どなかったこと、2006年初頭頃からは、電気スタンドの電球が切れたまま、新しい物を支給されない中で活字を読んだこと、目が疲れても目薬を支給されなくなったことなどが影響してか、監禁前には1.5あった視力が、0.2に落ちていました。このため、監禁前には裸眼で運転免許をとることができたのに、今は眼鏡がなくては車も運転できません。もっとも、運転免許証の書き換えには行けなかったので免許が失効してしまい、最初から免許を取り直さなければならなくなりました。

入院から2日後の2月13日、ジャーナリストの米本和広さんが見舞いに来てくれました。私は米本さんに監禁中のいきさつを話し、また、取材に協力するため写真撮影に応じました。なお、その翌日、米本さんが荻窪フラワーホームや宮村の家を取材に行ったところ、宮村が出てきて暫く話し、私に対し脱会説得をするためフラワーホームに来たことを認めたとのことでした。また、宮村は私が長期監禁され家族から虐待されたために痩せ細ったことについて、「後藤が断食なんかするからだ」と言ったとのこと（2008年3月5日付米本和広陳述書）。私がハンガーストライキを始めたのは2004年4月のことであり、宮村は2001年2月に最後に804号室に来て以降も、私の家族等と連絡を取り続け、私に対する監禁を共謀し続けていたことが上記発言で明らかとなりました。

ところで、ハンガーストライキ自体、監禁から解放されるためやむなく行ったことであり、2004年に21日間、2005年に21日間、2006年に30日間と3度に亘る命がけのハンガーストライキを執行しなければ、解放されることはなかったと思います。また、こうしたハンガーストライキをしたとしても、普通の食事さえ出してくれていたならば、2006年4月のハンガーストライキが終わってから1年11ヶ月も経っていた2008年2月10日の監禁解放当時、体重が元に戻らないなどということはありません。

なお、監禁解放後の2008年9月、私は、統一教会の合同結婚式に参加し、その後入籍、今の岩本姓となった次第です（妻の家には男兄弟がおらず、跡取りがいないため、私が岩本家に入ることにしました。）。40代半ばにしてようやく結婚することができ、家庭を持つことができた今、遅まきながらささやかな幸せをかみしめています。

7. 最後に

信教の自由が保障されている日本にあって、信仰を棄教させるために12年5ヶ月間もの長期に亘って監禁し、集団で非難を浴びせ、精神的・肉体的に虐待して苦痛を与え、脱会を強要するこのような行いは、拷問以外の何ものでもなく、絶対に許すことができません。一体私がどのような罪を犯したために、12年5ヶ月間の期間、留置されなければならなかったのでしょうか。兄や兄嫁は、元々自由意志で信仰心に燃えて統一教会の信仰をしていたにも拘わらず、脱会した後になって、意に反して伝道され活動に従事させられたなどと嘘の主張をして、「青春を返せ裁判」を起し、統一教会から賠償金を得ています。

それに比べ、私は31歳から44歳までの12年5ヶ月間、狭いマンションの一室に拘束され続け、信教の自由、結婚の自由、職業選択の自由、居住移転の自由、投票の自由を奪われたことは元より、人間の尊厳を根底から否定し尽くされ、貴重な人生を台無しにさせられました。しかも、監禁中は人間性を無視した非難、罵倒、中傷と、監禁を継続するための暴行傷害、そして食事制裁による拷問を受け棄教を強要され続けました。

しかも健康診断などが受けられなかったことは元より、40度近い高熱が出ても病院にすら行くことを許されず、餓死寸前になっても解放されませんでした。このような犯罪は前代未聞です。ところが、監禁に関与してきた家族や宮村等には一切の反省もなく、それどころか、宮村は荻窪フラワーホームの玄関ドアが南京錠などで施錠されていたことを知らなかったなどと言って責任逃れをする構えを見せているのです。

私が12年5ヶ月にも亘る監禁と精神的・肉体的虐待にも拘わらず統一教会の信仰を失わなかった理由の一つは、監禁している側の残虐な行いを目の当たりにすればする程、統一教会に反対している宮村や家族等こそが悪の権化であって、自分は死んでもあのような悪の一味には属したくないという思いを強く抱いたことと、不当な監禁現場からいつの日か必ず自由の身となって、この悪質な人権侵害を万人に訴えていかなければならないという使命感を強く持ったためです。

裁判所におかれましては、どうか公正な判断を下し、単に私個人の救済というだけでなく、松永、宮村をはじめ今でも統一教会信者を拉致監禁して強制棄教を迫る活動を続けている強制改宗屋らによる人権侵害を撲滅する上で、大いなる警鐘を鳴らしていただきたいと念願しています。

以上